

国際学会会議

“Xinjiang in the Context of Central Eurasian Transformations”

参加報告

新免 康

2015年12月18日（金）・19日（土）の日程で、新疆史に関わる国際学会会議が東京で開催された（以下、敬称略）。オーガナイザは、小沼孝博（東北学院大学）、David Brophy（シドニー大学）、および新免が務めた。会議の基本的な趣旨は、以下の通りである。

新疆（中国領中央アジア）として知られる地域は、領域的に中国（中華人民共和国）に属する一方で、その住民の多数を占めるウイグル等のテュルク系ムスリムは、今日までその言語・文化の独自性を維持してきた。どのように新疆の地域性を把握するのかという問題を検討する上で、18世紀中葉から現代へと当該地域とその住民の辿った歴史のプロセスが、中国のみだけでなくロシア帝国およびその後のソ連におけるムスリム地域をはじめとする近接諸地域からも継続的に影響を受けてきたという点に、とくに留意する必要がある。しかし、従来、これらの関係性について具体的かつ詳細な考究がなされてきたとは言いがたい。

上記のような点を踏まえた上で、本国際学会会議は、世界各地から若手・中堅の研究者の参加を得て、新疆と隣接諸地域との間の人的な移動と交流に注目しつつ、前近代から現代へと至る（17～21世紀）新疆地域の社会・文化変容のプロセスについて多角的に検討することを目的とした。その際に以下の3点にとくに留意する。

①テュルク系言語の資料の利用やフィールドワークを基礎としつつ、当該地域に居住する諸民族の地域社会の各歴史段階における様相とその変化、そこにおける意識の様態にアプローチする。

②「少数民族」社会と国家の政策との関係性を、「イスラーム」対「中華」の対峙というような固定的な構図だけでなく、政治的な枠組の位相変移や政策の変動に注目しつつ、動的な相互連関の中でとらえる。

③イスラーム地域の空間的広がりや中央ユーラシア世界における広域的な交流を背景に、国際関係や地域間関係（とくにロシア領・ソ連領との関係）からの影響と相互作用という文脈において、とくに「近代化」のベクトルを軸とする社会変容のあり方を探究する。

上記を基本的な趣旨として開催された本学会会議は、アメリカ合衆国、オーストラリア、

中国（香港）、台湾から、現在続々と先端的な研究成果を挙げている中堅・若手研究者 8 名を報告者として招聘し、日本の中堅・若手研究者も報告者に交えて開催された点に特徴がある。扱われる時代の順序に応じて 4 つのセッションから構成され、全体として 12 の報告がなされた。以下、セッションごとに報告の順に従って、各報告の内容を簡単に紹介する。なお、本稿末尾に本学術会議のプログラムを掲載した。報告のタイトルについてはそちらを参照されたい。

第 1 セッションは、いわゆるヤルカンド・ハン国の時代から清朝統治期へと至る新疆の状況について、社会・経済・文化などの側面から多面的に検討する 3 報告からなっていた。まず Rian Thum の報告は、ヤルカンド・ハン国の時代におけるタリム盆地周縁オアシス地域に対するムガル帝国からの影響について論じた。カラコルムという地理的障壁を越えた、政治・経済面、さらに宗教文化面における両者の間の具体的な関係性について指摘した上で、とくに両者の貨幣の比較検討を通して、両者の間の密接な経済的結びつきについて検証した。次に、小沼孝博の発表は、政治勢力と地方商人の関係性に注目し、天山南側のカシュガリア・オアシスにおけるキャラバン交易の伝統的なシステムを跡づけることを通じて、清朝征服後の変化について検討した。キャラバン交易の利益がハン国を直接潤す体制ができあがっていたヤルカンド・ハン国時代に対し、清朝征服後は清朝の政策によりムスリム商人の域外交易が厳しく制限されたことなどを指摘した。Matthew W. Mosca の報告は、新疆に関する著作として広く頒布された、満洲人官吏ジシイ（七十一）の著作が清朝においてどのように受け入れられたかについて考察した。当該著作は、清朝政府によって出される地誌の付録として上梓されたにも拘らず、発表された後の数十年間は、あたかもそれが公的な地誌であるかのように扱われたけれども、嘉慶時代以降はその信憑性について疑義が示されるようになったことを明らかにした。

第 2 セッションでは、清朝統治期の新疆における特有な政策を背景とした社会状況に関する報告や、新疆の境界を越えた民族をめぐる諸関係に関わる報告が行われた。まず Rune Steenberg の報告は、現代のウイグルにとって親族関係が仕事の機会や社会的な安定に資する社会的なネットワークの中核に位置することを指摘した上で、以前の父系制的な MBD システムから、認知・交換作用と近親婚に基づくシステムへという、親族の概念化と実践の変容が、とくに新しいタイプのエリートと親族関係の創出を促進した清朝の政策を背景として生じてきたという興味深い仮説を提示した。次に、野田仁の報告は、19 世紀におけるカザフ遊牧民のロシア帝国と清朝の境界を越える移動と、両帝国のカザフ遊牧民たちに関する政策について検討した。両帝国間の境界の画定にともない、カザフたちの帰属も確定されたが、部族間の紛争は境界を度外視して続けられ、その解決のために設置された国際的な集会 (s'ezd) が、地域の安定保持に重要な役割を果たしたことを論じた。海野典子の報告は、清

朝領からロシア帝国領に移住した、漢語を使用するムスリム（ドゥンガン）についての研究が乏しい現状を踏まえ、ロシア領で生存し、ソヴィエト期における民族的境界画定を経験したドゥンガンとタランチの関係性について注目した。その中で、両者は信仰を基盤とした相互協力関係にあったが、言語文化的差異を背景として分裂状態に陥ることもあったことを明らかにした。

第3セッションでは、新疆省設置以後の清朝末期と中華民国期における新疆の社会・文化変容の問題を扱う報告がなされた。まず、Eric T. Schuessel の報告は、清朝の新疆再征服後、漢語に堪能なテュルク系ムスリムの官吏たちの階層を産みだした、儒教と漢語の教育システムの知的な起源、制度の成り立ち、生徒たちの生活について論じ、この「義塾」で勉強したテュルク系の儒者がしばしばそれら複数のコミュニティの境界を越えつつその人生を過ごしたこと、彼らのある者はその富と官職を得るためにその立場を利用したことなどを指摘した。次に David Brophy の報告は、清朝末期のグルジャで出されたタタール語の小説である、ガブドゥルガズィズ・モナスイポフの『タランチの娘』について紹介し、それが20世紀初頭における新疆のロシア領ムスリム地域との社会的・知的つながりのあり方を窺わせること、ロシアと清朝のそれぞれの臣民であるムスリムたちの間で、帝国の境界を越える結束を作り出す可能性がいささか疑わしいことについて論証した。Joshua Freeman の報告は、1930年代半ばから省政府の実権を掌握した盛世才政権下の新疆において、ソ連からの強い影響のもと、諸民族語による印刷文化の導入、民衆レベルの学校教育システムの確立など大きな変化が生じたことを示した上で、その中でカザフスタン出身のウイグルであるマンスール・エフェンディが担った役割について検討し、新疆の近代化を加速させた動向におけるキーパーソンと位置付けた。

第4セッションでは、1950年代以降の現代新疆における諸問題について、国際関係を含め、さまざまな角度から論じられた。Niccolò Pianciola の報告は、文書館における調査と、新疆からカザフスタンに移住したカザフやウイグルの人々へのインタビューに基づき、中国からソ連への移住の多様な様相、地理的なパターン、そしてその動機について分析し、それを1949年から1976年までの時期における中国—ソ連関係の文脈の中で位置付けるとともに、カザフスタンの諸地域における移住者の定着の過程と移住者をめぐる状況について論述した。次に Zhe Wu（呉啓訥）の報告は、冷戦期の新疆をめぐる中国、ソ連、米国の相互関係について、その中における中華人民共和国政府の政策に軸を置きつつ考察した。当該地域に関わる問題が、冷戦の両陣営の間における不信と敵意を増幅させるとともに、社会主義陣営の中においてさえソ連・中国両国の関係をなおいっそうとげとげしいものにしたことを指摘した。最後に、Kolodziejczyk-Tanaka Maria と田中周の共同報告は、ウイグルのイスラーム・テロリズムという現象とそれに対する中国政府の対応と、反テロ政策と辺境政策の間のつな

がりについて検討した。とくに、中国の民族政策を背景とするウイグルの分離主義の特質について明らかにした上で、中国政府の新疆における反テロ政策の具体的な戦略、その対外関係面における様相などについて分析を加えた。

第4セッション終了後の総合討論においては、まずコメンテーターの Ablet Kamalov より、近年の新しい研究の展開が、ソ連崩壊後に政府文書の利用が可能になったことなど史料環境の大きな変化を背景とすること、などの点が指摘されるとともに、各報告者に対する質問・コメントが提示された。これに対する各報告者の回答・コメントの後、フロアーも交え、きわめて活発な議論が展開された。

本学会議は、世界の新疆史研究の分野で現在きわめて旺盛な仕事を示している若手研究者たちの参加が実現したこともあり、新疆研究の分野における最先端の研究動向を反映したものとなったと言える。とりわけオーガナイザより示された本学会議の趣旨に沿う形で、ユーラシアをまたぐ、新疆と隣接諸地域との境界を越えた人的交流の文脈において、地域社会レベルも含む新疆の歴史の変容をとらえていくという志向性を軸とする研究成果が集積された印象がある。日本の中堅・若手研究者も含め、このような交流の場をもつことができたという点において、一定の意義があったと考えられる。なお、本学会議をもとにした英文の論文集が、2017年に、東洋文庫の Toyo Bunko Research Library (TBRL) のうちの1冊として編集・刊行される予定である。

-----

**Date:**

December 18–19, 2015

**Venue:**

**Dec 18 (Fri)**

Lecture Room (2nd floor), the Toyo Bunko

**Dec 19 (Sat)**

Main Conference Room (3rd floor), Institute for Advanced Studies on Asia, the University of Tokyo

**Supported by:**

Department of Islamic Area Studies, Center for Evolving Humanities, Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo (TIAS); the “Cross-border Migration in Central Eurasia and Cultural Transformation of Xinjiang Muslim Society in the 19th to 20th centuries” project, supported

by JSPS Grants-in-Aid for Scientific Research; the “Religious Culture in the Fringe Land of Japan, China, and Korea” project, at the Institute for Research on the Historical Culture of the Asian River Basins Area, Tohoku Gakuin University; and the “Japan and Eurasian Society” project, at the Institute of Policy and Cultural Studies, Chuo University; Central Asian Studies Group 2: “Islam and Political Power in Modern and Contemporary Central Eurasia,” Inner Asian Section, Research Department of the Toyo Bunko.

**Conference coordinators:**

Shinmen Yasushi (Chuo University)

Onuma Takahiro (Tohoku Gakuin University)

David Brophy (The University of Sydney)

**Program**

**Dec 18**

**Venue:** Lecture Room (2nd floor), Toyo Bunko

**Registration**

**Opening Remarks**

**Session 1**

Chair: David Brophy (The University of Sydney)

Rian Thum (Loyola University)

“Moghul Relations with the Mughals: Economic, Political, and Cultural”

Onuma Takahiro (Tohoku Gakuin University)

“Political Power and Caravan Merchants at the Oasis Towns in Central Asia: A Case of Altishahr in the Seventeenth and Eighteenth Centuries”

Matthew W. Mosca (University of Washington)

“Cišii’s Writings and Their Context: An Unofficial Source among Networks of Officials”

--Tea break--

## Session 2

Chair: Naganawa Norihiro (Hokkaido University)

Rune Steenberg (Columbia University)

“Qing Policies and Close Marriage: Transforming Kinship in Kashgar”

Noda Jin (Waseda University)

“The Crossing of Imperial Borders and “International” Conflict Resolution between Russian Turkestan and Qing-ruled Xinjiang”

Unno-Yamazaki Noriko (The University of Tokyo)

“Cooperation and Opposition: The Relationship between Turkic Muslims and Chinese-speaking Muslims in the Early Twentieth Century”

## Banquet

### Dec 19

**Venue:** Main Conference Room (3rd floor), Institute for Advanced Studies on Asia, the University of Tokyo

## Session 3

Chair: Sugawara Jun (Tokyo University of Foreign Studies)

Eric T. Schluessel (Harvard University)

“Confucian Schools and the Interpreter Class in Late-Qing Xinjiang”

David Brophy (The University of Sydney)

“Representations of Class, Subjecthood, and Ethnicity in a Continental Treaty Port: Gabdulgaziz Munasib’s *Taranchi Girl* (1918)”

Joshua L. Freeman (Harvard University)

“The Curious Career of Mister Mañsur: A Uyghur Bolshevik in Xinjiang, 1935–1946”

**--Lunch--**

#### **Session 4**

Chair: Shinmen Yasushi (Chuo University)

Zhe Wu (Academia Sinica)

“Beijing’s Policy Drift toward Ethnic Issues in Xinjiang, Early 1950s to Early 1960s”

Niccolò Pianciola (Lingnan University)

“Migrations from China to Soviet Central Asia, 1949–1976”

Kolodziejczyk-Tanaka Maria (Waseda University) & Tanaka Amane (Aichi University)

“The Structure and Content of China’s Counterterrorism Policy: The Case of Uyghur Islamist Terrorism”

**--Tea break--**

#### **General Discussion**

Chair: Uyama Tomohiko (Hokkaido University)

Discussants:

Ablet Kamalov (“Turan” University)

#### **Closing Remarks**

(中央大学文学部)